『経済表』の構成について

―― 横山正彦『重農主義分析』から教えをえつつ ――

狭田喜義

『経済表』は3つの起点とこれを結ぶ数本の線からなっている。起点は純生産の生産ないし取得の視点から区別された経済的階級であり，また資本の再生産への関与の仕方からの区別であるともみうる。これら諸階級を結ぶ線は，それぞれの役割にもとずいて果す経済過程――財の分配と流通の過程を示すものであるが，同時に貨幣流通の過程でもある。『経済表』は，i) 純生産の生産と流通，ii) 資本の再生産，iii) 貨幣の流通の3者からなっているとみうるわけである。経済表のこの構成はいかにしてなされ，何を語るものだろうか。これを解く鍵は，『経済表』成立の基盤の中に与えられている。

ケネーの『経済表』を描いた意図が，フランス農業の完全な建直し la retablissement parfait にあったことは，周知の通りである。そのために，現実のフランス農業の観察，それが衰退の原因の摘出，再建の方途の樹立という厳密な方法が採用された。現実に根をおろした理想の王国が，こうして『経済表』の中に描きだされる。この王国建設のために，彼が現実の中に発見した支柱は何であったろうか。

「それ故，ここでは1つの大なる王国を想定するとしよう。この王国では，その領域内の農業が最高段階 plus haut degré d'agriculture に達し，年々50億フランの価値をもつ再生産をもたらすものとする。それは取引に関する自由競争と農業の所有に関する完全なる保証とが常に存在している場合に，貿易国相互間において成立するところの恒常的な価格 les prix constants にもとずいて，はじめて出現する状態である」(Quesnay, "Analyse", *Oeuvres*, p. 309)。ここに，「最高段階の農業」と「恒常的な価格」という2本の支柱が示されている。前者はいわゆる良耕 la bonne culture であり，後者はいわゆる良価 le bonne prix である。

『経済表』の構成要因は，この2本の支柱を基礎としている。直接的には，資本の再生産は良耕を，貨幣の流通は良価を，純生産の生産は両者の統一としての価値論を。それは，一方では現実の歴史の上に成立し，他方では理論の分析の上に体系づけられている。

経済学説を経済的基礎過程に照し内在的に解明しようという，特に戦後の学史研究に強調された分析方法が，重農学派について秀れた成果をうみだした。横山正彦教授の『重農主義分析』[1] がそれである。「端的にいって，重農主義の場合ほど，社会経済史――とりわけ，農業史――の一定の観点が，その学説の本質あるいは基本性格を規定するうえに決定的であることは，経済学史上おそらく他にその比を見ないであろう。われわれは，社会経済史学の業績に依拠しながら，できうべくんば従来の研究をこえた独自の重農主義分析を，あくまでもケネー自身に内在することによって，試みようとするものである」(横山『重農主義分析』40 頁)。

重農主義学派の性格に即応した分析方法と従来の諸見解の対立を克服せんとする強烈な意欲のうえに成立したところの，この著書から教えをえつつ，『経済表』構成の諸要因が，ケネー自身の研究経過の中で，いかに成熟していったかをみたいと思う。それはケネー経済学の性格規定に1つの手がかりを与えるであろう。

I 良耕と資本主義農業

『フェルミエ論』から『穀物論』にかけて，当時のフランスで行われていた2種類の耕作方法――小農法 la petite culture と大農法 la grande culture とが比較対照される。ケネーは，両者のもたらす生産高の相異を吟味し，大農法の経済的優位を実証する。ついで，大農法の支配的に採用された状態――良耕を想定し，これとフランス農業の現状――現耕 la culture actuelle とを対比し，前者が理想状態であることを論証する。紙幅の関係上，ここでは結論のみを記すにとどめる[2]。

第1に，現耕では，大農法の耕作面積は全耕作面積の 16.7 %にすぎないのに，その生産高は総生産高の 34.1 %，純生産高は純生産総高の優に 42.3 %におよんでいる。また，良耕では現耕に比し経費は9分の5増加するが，総生産高で3分の2，純生産高で5分の4という増加率が，これを償って余りあることを示す。純生産高率(10 分の1税を除いた純生産高の，種子を除いた経費に対する比)は現耕の 3.3 %に対し，良耕は 77.8 %である。

第2に，大農法優位の理由は，i) 経営耕作面積中の実際作付耕地面積の比較的大きいこと，ii) 単位面積あたり生産量の大きいため，経費の割安なること，iii) 生産物売上単価の高いこと，の3点に求めうる。また，良耕の優位は，主として大農法優位の以上3理由の拡張にもとずくが，i) については経営耕作面積自体の拡大と適地栽培，iii) については良価の成立が，新しく加わる。

大農法および良耕優位の理由は総じて，i) は2圃式耕

---

1) 横山正彦『重農主義分析』昭和 33 年4月，岩波書店刊。

2) 詳細は，拙稿「Quesnay の経済学と労働者階級」『広島大学政経論叢』第5巻第3，4号参照。

作に対する3圃式耕作. ii)は牛耕作に対する馬耕作という技術的条件, iii)は価格的条件に由来する。技術的条件から, 2種類の耕作方法は次のように図式化しうる。小農法＝2圃式＝牛耕作; 大農法＝3圃式＝馬耕作。(iii)は次項に譲る)

ところで, ケネーにあっては, この両図式に, さらに分益小作農および借地農という範疇が加わる。それは, 地代形態の区別としてよりは, 農業における富の必要性, ないし富める借地農の重要性を認識してである。経費の割安が, 投下絶対額の増大を前提とするからである。ここに, 大農法＝富める借地農＝3圃式＝馬耕作という形で, 経営形態が図式の一環を形成するととも, さらに他の諸要素をその中に包摂する[3)]。

ところで, 富める借地農とは何か。横山教授の力点の1つはここにおかれる。

富裕なフェルミエとは, 役畜をもつ富裕なラブルウル laboureurs のみを意味し, フェルミエ・ジェネローとは異るものである。それは資本主義的農業企業家を意味する。これが教授の見解である。(横山, 上掲書, 109—114 頁)教授も引用されるように『フェルミエ論』,『穀物論』を通じて示される富裕なフェルミエの職能は, 教授の見解の正しさを立証する。また, そこでの農業プロレタリアートないし半プロレタリアについての叙述もこれを裏書する。

教授はさらに,「経済的基礎過程に照しての学説の内在的理解」という分析態度にもとずき, アンシャン・レジーム末期のフランス農業に特徴的な2元的構造(地域的＝社会的差異)を指摘される。「それは, 大づかみにいうならば, 北部の大経営 (la grande culture) および定額小作割(fermage)の地方と中部・西部・南部の小経営 (la petite culture) が支配的な, 分益小作制(métayage)の地方との対立によって特徴づけられるものである。」(横山, 上掲書, 44 頁)ケネーの学説が, この2元的構造を背景とし, 北部の農業経営を念頭にして生れたことを明かにされる。「こうして北部フランスには, 農業資本主義化の推進者である大借地農業家による大経営が行われていた。農村プロレタリアの存在は, 共同体的諸権利の消滅の進行とともに, ますます多数になっていった。」(横山, 上掲書, 67 頁)これは,「大農法は現在, 主としてノルマンディ, ボス, イル・ド・フランス, ピカルディ, 仏領フランドル, エノおよび少数の其の他諸地方を包含する600万アルパンの土地に限られている」(Quesnay, "Grains", *Oeuvres*, p. 196) とのケネーの叙述に合致し, また,「……ケネーにとってなによりもまず問題であったのは, 経営形態ないし経営規模の問題……であって, 土地所有の問題……ではなかった」(横山, 上掲書, 55 頁)との, 教授の主張を裏書することにもなる。

ここに注意すべきことは, ケネーにあっては, 経営形態ないし経営規模の問題を, 技術的優位性を招来する富すなわち資本の優位性の視点から考察していることである。大農法における純生産の増大は, 一応は資本の生産力の結果として理解されている。彼が, 富の重要性, その保護を, 度々強調するゆえんである。

II　良価と農業利潤

横山教授は, さらに,『フェルミエ論』および『穀物論』の純生産物の分割についての数字例(地主: タイユ: フェルミエ取得分＝3：1：1または2：1：1)を手がかりに, フェルミエの所得としての「利潤範疇」の存在を論証される。(横山, 上掲書, 124—126 頁)蓄積ファンドをここに求めるケネーの論述の指摘をえて, 教授のこの見解は強化される。

ここに教授の見解は, 従来の解釈がケネーにおける利潤範疇の存在をまったく否定しているとし, それに真向から対立する。「しかし, ケネーにおいても明らかに, 農業利潤が剰余生産物＝剰余価値たる《純生産物》produit net の一部分(地代との分割部分)として把握され, そして, 農業資本の蓄積, したがってまた, 農業における拡大再生産のファンドとして把握されているのが見られる。この点は, これまでのケネー理解とはまったく根本的に異なる筆者独自の見解であるから, とくに読者の注意を喚起したいと思う。」(横山, 上掲書, 119 頁)と強調される。

さて, ケネー自身に立帰ろう。ここで興味をひくのは, 利潤と良価との関係である。良耕優位(大農法についても)の第3理由は価格的条件であった。小麦の平均価格を算出する『穀物論』の表例をみると,「輸出禁止(現耕)の場合」と「輸出許可(良耕)の場合」とでは, i)豊作ないし不作という年次決定の基準(収穫高)が異ること, ii)収穫高は同一でも, 価格が異ること, iii)安値と高値の値巾が異ることが, 注意をひく。このうち, ii)と iii)が良耕と現耕の平均価格に差をもたらす原因である。良耕のそれは, 良価の特色であるところの一定水準の高さと恒常性とを示している。

良価の特色である一定水準の高さとは,『人間論』によると, 根本価格 prix fondamental 以上に一定の農家所得を保証する程度の高さである。根本価格とは「経費・タイユ・借地料」の合計である。これは,「穀物の輸出が禁止されているフランスにおける小麦価格の状況」と「イギリスにおける輸出の影響をうける小麦価格の状況」との表示例(Quesnay, "Hommes", *Oeuvres*, pp. 31—32)に見出しうるものであるが, 両表を対比するとき, 次の諸点が注意をひく。i)収穫高が輸出の禁止・自由のいかんをとわず, 同一に想定されていること。ii)経費・タイユおよび借地料が, 作柄および輸出の禁止・自由の

3)　例えば, 富める借地農の経営であれば, 牛耕作ないし2圃式でも大農法であり, 馬耕作でも, 貧しい分益小作農の場合はこれに属さないことになる。

いかんをとわず，同一に想定されていること。iii)そのため，売手の平均価格と根本的平均価格の差が小麦の売上単価にのみ依存していること。この差額が農家所得であり，それはまさに農業利潤である。だから，農業利潤は完全に価格的条件，すなわち良価に依存しているわけである。

III 『経済表』の構成

ケネーの経済原理は機能分析であり，それが経済表を3階級構成たらしめている。

ケネー価値論の鍵という「豊富にしてしかも高価なるが富裕である」(Quesnay, "Maximes generales", *Oeuvres*, p. 335)の，豊富とは良耕を意味し，高価とは良価である。豊富をもたらすものは，農業労働・土地・借地農・馬・家畜の，ときによりその1つ，ときによりその組合せであるという。機能分析の場合に問題となるところの，生産性についてのこれら諸要因相互間の関係は論究されていない[5]。『フェルミエ論』・『穀物論』にみられる純生産物の分割々合も，量的関係決定の解明なきまゝに提示されている。

『経済表』は農業と商工業を対置し，両者の生産性の差(純生産の生産)を，生産要素の差としての前者の土地に求める。ケネーの機能分析は，『経済表』に，自然の生産力を基礎とし，「地代を唯一の剰余価値」とするの内容を与える。3階級構成もここに成立する。

ところで，『経済表』を，総生産物の分割，特に純生産物の分割を中心に図式化すれば，次のように示しうるであろう。

『経済表』; 富＝(原前払の年償却＋年前払)＋(純生産)
＝(経費)＋(タイユ＋借地料)

これに対応して，『穀物論』(ないし『フェルミエ論』)および「人間論」の場合を，前項までの説明から，次のように図式化しえよう。

『穀物論』; 生産高＝(経費)＋(純生産)＝(経費)＋(タイユ＋借地料＋農業利潤)

『人間論』; 良　価＝(根本価格)＋(農業利潤)＝(経費＋タイユ＋借地料)＋(農業利潤)

問題は，農業利潤範疇の『経済表』での消滅である。[6]

第1に，『人間論』の農業利潤は，良価の概念化を通じて，『経済表』では貨幣流通に転化する。それは，形式上は分析視点の移行に伴う。

『人間論』の農業利潤は，農業経営者の生産意欲の刺戟として導入されている。本来，純生産の一部であるタイユおよび借地料が，経費と同一範疇を形成し，純生産の一部である農業利潤に対立するのもこのためである。同様の概念は『フェルミエ論』および『穀物論』にもみられるが[7]，それはいずれも事前考察であり，微視的分析だからである。『経済表』では事後考察であり，巨視的分析である。生産刺戟としての良価は，この分析視点の移行を通じ，概念的な存在に転化する。良価は，量的規定としては，根本価格をこえ，農業利潤を保証するものであるが，質的規定としては，農業経営者の生産意欲をかりたて，生産を持続せしめるものであればたりる。良価はこの質的規定に概念化されることによって，価値実現の条件として現われる貨幣にその席を譲る。

ケネーにあっては，貨幣は流通手段であるが，その機能は，その入手が「それに値する価値に相当するだけ費用がかかるものである」(Quesnay, "Analyse", *Oeuvres*, p. 324)ことに依存する。そして「商品と見做された小麦は，売手にとっては貨幣的富である」(Quesnay, "Grains", *Oeures*, p. 238)というとき，貨幣は購売力すなわち需要の自立化として認識される。経済表が貨幣のタームから財のタームによる分析にその視点を移すとき，良価は貨幣流通の中に概念化され解消する。

第2に，『穀物論』における資本の生産力の意義は，『経済表』では資本の再生産過程に転化し，農業利潤はその一端としての年前払の中に解消する。

農業経営者は，企業資本家として確立されながら，経営労働者としても認識される。『経済表』の単純再生産の条件は，前者の利潤と後者の賃金の合計を，量的には賃金の大きさに圧縮することを可能ならしめる。そこでは，利潤もまた個人的消費となるからである。『経済表』の年前払は，量的には直接労働者としての農業経営者の生活資料を含むにすぎないが，概念的には農業資本家としての消費資料をも含む。年前払の再生産はここに農業利潤の意義を内包し，資本の生産力は，それを含めた全資本の再生産の中に，その意義を存置する。

ケネーの機能分析は，後の諸学説胚胎の原因であり，学説史上の意義を語るものであろう。ただ，『経済表』の機能分析は，労働者階級のみならず資本家階級をも，年前払という1つの資本形態の中に解消し，賃労働対資本の関係を生産階級という概念の中に解消する。農業利潤はその意義だけが概念化され，良価を基礎とするものは貨幣流通に，良耕を基礎とするものは資本の再生産に転

---

4) Quesnay. "Premier problème économique", *Oeuvres*, pp. 507—508. 横山，上掲書，121—122 頁。

5) しいていえば，比較法よりは喪失法に近い分析方法である。

6) 図式の説明については，拙稿「経済表の構成と純生産の概念」『広島大学政経論叢』第6巻，第3，4号参照。なお，『穀物論』と『人間論』での農業利潤の位置も問題になろう。

7) そこでは，「借地農の負担」という形で示される。そこでの問題も，農業経営の存続からみた，小麦価値の水準の検討である。以上のことがまた，註 6)への回答となろう。

化して終る。

IV　ケネー経済学の基本的性格

最後に，ふたゝび横山教授の見解に戻ろう。ケネーの叙述の歴史的分析から資本主義的農業者を，その理論的分析から農業利潤の範疇を摘出した教授は，地代の所得者(＝土地所有者)が企業者所得の所得者(＝農業経営者)から分離していること，所得範疇としては地代と利潤が分離していること，それは「農業利益の3分割」を語るものであること，以上によって，ケネーの語るところが「農業資本主義論」であると，一度は規定される。(横山，上掲書，128 頁)ところが，突如として次のように結論される。「だが，しかし，ケネーにおける《利潤》把握といっても，それは，《produit net》(剰余価値)がまず第1次的にフェルミエの手に利潤として取得され，(利潤が剰余価値の正常的形態)，しかるのち，その《produit net》(利潤)の一部分がフェルミエから地主の手におさめられる(利潤の一部分が地代に転化される。すなわち，地代が剰余価値の一分枝となる)という関係においてとらえられたところの《利潤》ならびに《地代》把握ではけっしてなかった。」(横山，上掲書，150 頁)

ケネーの利潤範疇についての，このような性格規定の転換は——教授にとっては一貫的規定かも知れぬが——何らの論証も与えられていないように思う。その上ここから，重農学派の基本的規定——資本性と封建性という2元的構造の規定が導出される。もっとも，その間に，地代を剰余価値の唯一の形態とする『経済表』の存在の指摘と，ケネーのみた富める借地農の形態が，従属的ウクラードにすぎず，支配的ウクラードは封建的であったとの，歴史的説明が挿入されてはいる。『経済表』が「全経済理論の体系的＝集中的表現」であることを承認されながら，『経済表』自体は，利潤範疇の説明なき特殊化の一翼をになわされているにすぎない[8]。

『経済表』の特色は地代範疇と資本の再生産にあるといわれる。ケネー研究の多くは，この『経済表』を出発点とし，しかも両特色の統一的理解に努力することなく，地代範疇のみから，封建性のレッテルを貼るに急である。それは，既定の結論から分析を遡及するという，従来の経済学史研究の通弊にもとずくものであろう。

8)　『経済表』の経済循環の意義については，同著附論(267 頁以下)に詳説されている。

教授はこの弊を打破し，ケネー自身の出発点を出発点とされる。利潤範疇の摘出によって，通説のレッテルをはぐ準備はでき上る。だが，ここから先を急がれすぎたのではなかろうか。『フェルミエ論』および『穀物論』の利潤範疇は，『経済表』の地代範疇に直接対置され，歴史的分析は両者の理論的ギャップを埋めることに終っているように思う。

もっとも，その2元性自体については，次のように統一される。「だが，ここで注意しなければならないのは，まえにも触れたように，このような資本性と封建性との交錯＝2元的構造といっても，それは，けっして，たんなる並列的あるいは等しい比重での結合ではなく，資本主義的性格が本質であって，封建的なものは，いわばそのヴェールであり，看板であったという点である。」[9]

発展史的視点——それは教授の用語ではないが——は最後まで貫徹されねばならぬ。『経済表』の機能分析方法が上述の特色をうみだしていることと，ケネーにとってそれが最終的体系であることとの関係，『経済表』構成諸要因への利潤範疇の解消すなわち体系的包摂，ここにこそ，ケネー経済学の基本的性格を決定する鍵があるのではなかろうか。

教授の『重農主義分析』は，豊富な資料の厳密な検証の上に，経済的諸原理・経済政策論・政治理論・哲学理論から社会経済史に及ぶ広範な分野をくまなく解明し，しかもそれを，重農主義学派の基本的性格についての独創的見解の立証に一元化するという，一大大作である。この方面の分析に新紀元を開くものとして，その高見と努力とに対し，最高の敬意を表したい。

したがって同著は，教授のいわれるように，確かに，「たんなる《ケネー研究》といったものではない。」(横山，上掲書，はしがき，iii 頁)し，本稿もまた——力及ばぬ理解とともに——書評には相当しないであろう。ただ，教授も「はしがき」の日附に記念されているように，本稿も『経済表』200 年に際会しての執筆であり，こういう形でのぶしつけな学び方を許して戴けると思う。

(1958. 7. 13)

9)　横山，上掲書，183 頁。同様に，「もちろん，土地所有者の利益ということがたえず表面に押し出されてはいたけれども，それはあくまでも表看板であって，実際は，資本家的借地農業者の利益がかれらの主たる関心の対象であったと，いわなければならない。」(横山，上掲書，184 頁。)